

「今、私の晴雨計は！④」

「心穏やかにしてくれる音楽の話」

平山 征夫

ポーランドシリーズで今年の晴雨計を終わろうとしたら、いつも晴雨計を清書・配信してくれている秘書のK嬢(?)に「先生！これで歳を越すのはちょっと暗くありません？」と言われた。確かにそうだ。ヒトラーと一緒に正月を迎えたくはないだろう。では穏やかな気分で年末・年始を迎えられるテーマをと考えていた週末、ラジオから懐かしいテーマ音楽が流れてきた。「ひるのいこい」である。

このラジオ番組が始まったの

は、昭和27年11月、私が小学校二年生の時だから65年続いていることになる。超長寿番組だ。日本各地の「NHK農林水産通信員」から寄せられる便りの紹介は、のどかな農村風景を思い浮かばせてくれたが、何よりもそれは古閑裕而作曲のテーマ音楽の穏やかなメロディによるだろう。ゆったりした美しい曲で、今でも大好きだ。久し振りにこのテーマ音楽を聴き懐かしい気持になると同時に、亡くなった母のことを思い浮かべた。

私が通った柏崎市立第3中学校は、戦後の学校制度への対応が遅れたのか、入学した時は我が家のすぐ向かいの元青年学校を仮校舎としていた。私の小さい時か

らの遊び場のひとつだ。一年の終わりに自分の椅子を持って山の麓に出来た新校舎に引っ越すまでの九ヶ月くらいはこの校舎だった。あまりに近いので毎昼校舎の裏から砂場を抜けて自宅に昼食を食べに行っていた。家について母が作ってくれていた昼食を食べ始める頃にいつもラジオからこのテーマ音楽が流れてきた。貧しい何処にもある普通の家庭の母と子が短い昼のひと時何を話していたかは覚えていないが、この音楽が流れていたことと、何とも言えない穏やかな気分になったのは良く覚えている。だからこのメロディを聴くと母と過ごしたあの日の幸福感が甦る。

こんなことが何度かあった。

帰ると母は留守で鍵がかかっていた。仕方ないので家の裏に廻り、台所の一番貧弱な鍵のところを何とか開けて入った。暫くすると慌てて母が帰ってきた。「どうやって入った？」と聞く。同じことが何度か重なった時、母は言った。「やだよ！この子は鍵を強化しても入るんだもの。妙な才能を持っているんじゃないよね」。その時もこの音楽が流れていた。

久しぶりに聴いたその日のラジオで読まれた聴取者からの便りは、偶然親父の出身地村上のTさんからだった。

「戦後、満州から引き上げてきて必死で働いて私たちを育ててくれた両親、その後をついで故郷で家庭を持って生きてきました。

人の紹介で顔も見ずに嫁いできた妻は、翌日から家事や畑仕事、そして育児に黙々と取り組んでくれました。良く考えてみますと金婚式もとうに過ぎたのに一度も妻に「有難う」と言ったことがありませんでした。電波を借りてですが、感謝の言葉を伝えたいと思います。有難う。」

「Me too」なんだけど、私には伝える電波が無いなあ・・・。

心穏やかにしてくれる音楽で少年時代から好きな曲の話しよう。小学六年生の春だったと思う。放課後校庭で遊んでいた私の耳に聞き覚えのあるメロディが突然飛び込んできた。帰宅の合図曲が変わったのだ。私は思わず叫んでいた。「笛吹童子だ！」と・・・。

「笛吹童子」は、昭和27年から始まったNHKのラジオドラマ「新諸国物語」シリーズの第二作で、私が八歳から九歳の昭和28年の一年間放送された。平日夕方15分の連続放送だったが、夕方になるとラジオの前に座り込んで胸躍らせて聞いた。この時代女性たちがラジオにくぎ付けになって女風呂が閑散とした「君の名は」が有名だが、同じように少年たちはこのドラマに熱中した。そのドラマの主題歌は、原作者の北村寿夫作詞、尺八奏者の福田蘭堂作曲で有名になった「ヒヤラーリヒヤラーリコ ヒヤラーコヒヤラレロ・・・」だが、福田蘭堂はドラマ内で笛吹童子（菊丸）によく笛を吹かせた。その曲がとても美しく

子ども心にもうっとり聞き入っていた。校庭に流れた曲がそれにそっくりだった。飛んで行って先生に聞くと「これはトップラという人が作曲したハンガリア田園幻想曲という有名なフルートの曲だよ」と教えてくれた。早速それだけが入った小さなレコードを買ってきた。フルートは「林リリ子」だ。それからこのレコードを何度聞いただろうか。今でも黄色のレーベルを覚えている。林光の従妹で当時すでに女性フルート奏者の第一人者だったようだ。1956年の日本フィルの創設に参加しているから、その前後いずれかの録音レコードだ。聴くたびに自分の心が美しくなるような気がした。

そういえば「笛吹童子」は翌年映画になった。中村錦之助、東千代之助のデビュー作ということ で町中にポスターが貼られた。見たくてしょうがなかったが親に言えなかった。何故か父はターザンの映画は連れて行ってくれたが・・・。母が一度夜子供連れで映画に行ったことがあった。今振り返れば家に父を残して映画に行くのに気が引けた母の戦略だったのだろう。連れていかれた映画は「愛染かつら」だった。映画と母で思い出したが、高校生の時、友達と映画見に行くと言うと「なんとという映画」と聞く。「昼下がりの情事」と言うと「そんな妖しい映画はだめだ」という。「情事」という日本語訳が悪い。原題はラ

ヴ・アフエアだよ」と説明したが、余計分からなくなって困ったことがあった。今でもヘップバーンを見ると思い出す。

もう一つ綺麗な曲として「マドナ」の宝石」の話をしよう。私より三つ年上の兄が早大を卒業して入社したのはTBSだった。高校生の頃から大学は早大・仏文、就職はドラマのTBSと決めていた。だから勉強嫌いな兄の就職を心配して母が親戚ということとで連れて行った文芸春秋の池島信平社長にも「就職はTBSしか考えていませんので・・・」と言って母を困らせた。ドラマ希望で入った兄が幾つかのドラマのフロアーディレクターを担当した後「東芝日曜劇場」を担当した。

ある日、アパート(その後上京してきた妹と三人で武蔵新城の6<sup>4,5</sup>畳のアパートに居住)に帰ってきた兄が「今度のドラマに重要な役割をする曲を選定しているのだが、これはどうだろう」と言っているのが「マドナ」の宝石」だった。使われるのは「天国の父ちゃんこんにちは」という実話をドラマ化したもので、夫亡き後、二人の子供を育てながら、パンツの行商をしてたくましく生きる森光子演じる母と子供役の二木てるみと松山省二の三人家族が力を併せて明るく生き抜いてゆくドラマで、1966〜74年まで不定期のシリーズで20本放映された。毎回ドラマの後半に困難に遭遇した時など仏壇の

父ちゃん(遺影は兄の上司のものだったと思うが...)に向かって、三人が集まって父がプロポーズの代りに読んだという「五月の歌」を朗読し語りかけるというシーンが出てくるのだが、その時バツクに流れるのがこの曲なのだ。実に詩にぴったりの美しい曲だ。そのうえ貧しいながら力を併せて生きる庶民の気持ちの爽やかさまで感じさせた。その後この詩を何度か結婚式の御祝いの挨拶に使わせてもらったが、今の時代には通じないような気がして少し淋しい。

精一杯愛する心だけでも結婚してくれませぬでも結婚してくれませぬ兄はその後ドラマを離れ、ドリフターズの「全員集合」を長く担当、その後「わくわく動物ランド」や「ギミアブレイク」などのプロデューサーを勤め、人気プロデューサーにはなったが、希望のドラマではなかった。そのことをどう思っているのだろうか。まだ聞いていない。

今年も残り僅か。年末のうちにこのどれか一曲聴いてみてください。穏やかな気持ちで新年を迎えられることでしょう。

では、良いお歳を(もう既にいい歳の方には失礼!)

柔らかな五月の若葉と

(平成29年12月27日)